

はじめに

実践研究の次に期待すること

教育実践研究は、一般的に言うと、(1) 児童や生徒の学びの実態を十分踏まえて授業の状況を省察し、(2) 児童・生徒の学びに合わせて学問的理論や知識を再構築し、(3) 授業内容や授業方法を改善・開発するという手順を踏む。その中心にあるのが児童・生徒の学びであることは言うまでもないが、学びの発展深化のためには、実践展開に即して実態を記録し、より深く検討していくことが不可欠である。検討する際には、ひとりよがりのドグマに陥らないよう、実践の意味や内容を周囲と絶えず議論し共有することが重要である。そうした実践の営みを積み重ね、他者と比較し相対化することで、実践研究の理論化が可能になるように思う。これら営みの繰り返しを「学校教育における理論と実践の往還」と呼ぶ。理論と実践の往還では、教育課題に関する様々な事例を構造的、体系的にとらえ直す（再構築する）ことが肝要である。また、児童・生徒、学校の実態を踏まえて、事例研究、授業観察・分析、模擬授業、ロールプレイング、フィールドワーク（現地調査）等を試みることが有効である。これらの過程を通じて自らの実践を検証し他者と議論することにより実践研究は深みを増す。ここまで述べてきたことは、以前「学校教育実践実習の手引き」に書いたことに重なるが、大学院で実践する基本的な「型」であると思う。

院生諸氏は修了後に、本誌にまとめた研究成果を実習協力校を始めとする学校現場や地域に還元することが期待されている。成果を市町の公立学校や教育委員会にも披露し、広く意見を求めることにより、地域の教育課題の解決にも寄与する可能性がある。自らの学修にも派生的広がりや深まりが期待できる。同時に、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組む自身の姿に気づいたり、会得した新しい知見や技能が自家薬籠中のものとなることもあろう。

本誌に掲載された実践研究は、いずれも院生諸氏の努力によるものであるが、長崎県教育センター、県内の各公立学校、本学部附属学校園の温かいご支援とご指導によって成しえたものであり、それらなしでは成しえなかったものである。県教育センターや各学校の諸先生方を始め、県・市・町教育委員会の関係各位に感謝の誠をささげたい。真に有難うございました。

末尾ながら、修了する院生が本大学院で習得した研究成果を勤務する学校や地域に還元し、継続して自らの学修を深められんことを望みたい。

令和2年3月

長崎大学大学院教育学研究科
研究科長 松元 浩一

目 次

はじめに

学校教育実践実習の概要と報告・・・・・・・・・・・・・・・・

大学院生による学校教育実践実習の報告

実 習 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・

実 習 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・

実 習 3 ・・・・・・・・・・・・・・・・

実 習 4 ・・・・・・・・・・・・・・・・

実 習 5 ・・・・・・・・・・・・・・・・

学校教育実践実習の振り返り会・・・・・・・・・・・・・・・・

教育実践と省察のコミュニティ 2019

「新しい時代の教育実践をめざして」・・・・・・・・

授業デザイン演習・・・・・・・・・・・・・・・・

クロスセッション 2019・・・・・・・・・・・・・・・・

教育実践研究成果の発表概要・・・・・・・・

学校教育実践実習の概要と報告

学校教育実践実習のねらい

学校教育に関する基礎的・理論的な理解の上に、学校の教育活動全般を主体的に経験し、省察すること。また、学級経営、授業実践、生徒指導、教育相談等にかかわる課題や問題に関し、指導教員の指導の下で自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。

構成

- ・ 学校教育実践実習 1 (学級経営、生徒指導)
- ・ 学校教育実践実習 2 (学級経営、授業実践)
- ・ 学校教育実践実習 3 (生徒指導、教育相談)
- ・ 学校教育実践実習 4 (各コース実践研究)
- ・ 学校教育実践実習 5 (各コース実践研究)

学校教育実践実習の内容

教職大学院における教育実習は、大学院生が学校の教育活動全般を経験できるように、「学校教育実践実習 1～3」において、便宜上、実習ごとに中心的な内容（学級経営・生徒指導、学級経営・授業実践、生徒指導・教育相談）が定められており、大学院生は、これらの実習を含む全ての実習（「学校教育実践実習 1～5」）において、主体的にテーマを設定し、実習の計画を作成し、積極的に取り組むことが求められている。

学校教育実践実習 1（学級経営・生徒指導）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、児童・生徒理解に基づく生徒指導等に必要な資質や能力の向上を目指す。

実習内容

学級経営補助や基本的生活習慣づくりの補助など、学級担任教師の活動の観察や補助活動を通して、学級経営の意義と実際について理解を深め、実践できるようにする。また、各教室の掲示物、児童・生徒の座席配置、安全への配慮などを、観察や担任教師からの聞き取り等を通して理解し、実践できるようにする。

また、児童・生徒の行動観察や指導補助を通して、一人一人の児童・生徒の個性や集団としての特徴などについて、さらに児童・生徒が学校生活、学級生活に満足感を持ち、楽しい学校生活を作っていくための条件などについて理解を深め、集団づくりやソーシャルスキルを育てるための手だてを修得する。

院生による学校教育実践実習 1 の報告

朝長 紗英子（学級経営・授業実践開発コース）

実習 1 は、「学級目標の実現に向けた教師の手立て～学級での取組や児童との関わり方について～」をテーマに長崎大学附属小学校の 4 年生の学級において行った。学級目標とその実現のための教師の手立てについては、主に観察や教師に聞き取り、手立てによって児童がどのように変化したかについては、観察や児童との関わりから把握を行った。この実習を通して、学級目標は児童の実態に応じて考えること、教師と児童の目指す学級像をともに話し合いながら考えていくことの大切さを学ぶことができた。教師と児童の目指す学級像を学級掲示等ですぐ確認できるようにしたり、学級目標をキーワードとして日常的に使ったりすることで、学級目標を形骸化させるのではなく、実現に向けて取り組んでいけるような生きた学級目標になるのではないかと観察や教師への聞き取りを通して考えることができた。今回の実習の学びを来年度の実習 4・5、そして現場で生かしていきたいと思う。

学校教育実践実習 2 (学級経営・授業実践)

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、指導計画や学習指導案の作成、授業実践等を通して、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに授業力の一層の向上を目指す。

実習内容

学級経営の計画、学校の組織運営(校務分掌)の在り方について演習を通して理解するとともに、学級づくりのためのソーシャルスキル訓練の実習、討論を通しての話し方・聴き方の育て方等の能力の向上を図る。さらに、学級通信の作成補助などを通して家庭と連携する力量を高める。また、事例研究などを通してP(計画)―D(実施)―C(評価)―A(改善)のマネジメントサイクルによる実践ができるようにする。

また、教育課程編成の在り方や運営、具体的取組について実践的に学び、年間(単元)指導計画や学習指導案の作成、学習材の開発、及び授業参観や授業補助、授業実践等の活動を通して、教師の日常の活動を学び、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに、授業力を一層向上させる。

院生による学校教育実践実習 2 の報告

山口 慎太郎 (教科授業実践コース)

本実習テーマを「教科指導の中で機能する生徒指導の実践」と位置付けた。自己決定・自己存在感・共感的人間関係の三機能に応じた具体的手立てを各10項目設定し、自己指導能力向上を意図した理科授業を計10時間実施した。学びの基盤に関わる個々の規律性や協調性の課題に対し、①好ましくない姿を正す、②I messageによる承認・賞賛・激励すること、によって場面理解や状況判断の伴った適切な行動を選択する生徒の姿を見取った。授業のねらいやめあてに対し、①考える視点の提示、②個人活動の場の設定、③学びを振り返る機会の確保により、多くの生徒が主体的に学ぶ姿勢を示した。また、これらの指導は、行動の価値理解の促進や行動の判断基準の適切性を高めていく見方から、個よりも集団への働きかけがより効果的であることを示唆していた。研究の指針である「集団指導を通じた個の育成」に対し、指導観の再構築に繋がる実践となった。

学校教育実践実習 3（生徒指導・教育相談）

目標

児童・生徒理解に基づく生徒指導、教育相談、特別支援教育、キャリア教育等に必要な資質や能力の向上を目指す。また、一人一人の児童生徒のニーズに合った指導・支援についての理解と適切な指導能力を培うことを目指す。

実習内容

児童生徒の持っている力を引き出すために、生徒指導の3機能である「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」を適切に位置づけた学級経営や教科指導を計画し実践する。

また、教育相談的視点を生かした集団づくり・授業づくりを計画・実践し、教育上の配慮を必要とする児童生徒への合理的配慮の在り方についても理解し、実践する。

いじめ、不登校等の要因となる指導上の課題を見出し、改善のための具体的方策を考え取り組むなどの実践ができるようにする。

院生による学校教育実践実習 3 の報告

兵頭美帆（教科授業実践コース）

実習 3 では、諫早市内の公立高校の 3 学年 1 8 クラスにおいて、英語科の授業や学科の行事等を参観させていただいた。実習校は専門高校で、各科の特色を反映した教育課程が編成され、授業内容も様々であった。

実習 3 の主たるテーマは生徒指導・教育相談であった。実習校の現状を担当分掌主任から直接お話を伺った。自分の経験等と重ね合わせて比較や考察をすることで、これからの学級経営や生徒指導への新しい視座がもたらされた。各学校が直面している状況は違っており、学んだものをただ模倣するだけでは生徒の成長に寄与しない。正確な実態把握に基づいて、個に応じた適切な対応を教職員が一体となって、展開していくことの重要性を改めて痛感する実習となった。

授業経営においても、この実習で学んだことを生かすことができる。教育相談的な視点を授業経営の中に組み込み、生徒たちにとって、居心地がよく安心感の持てる授業や学級を作り、生徒たちと共に楽しく学校生活を送っていきたい。

学校教育実践実習 4・5（各コース実践研究）

目標

学校教育にかかわる実践研究課題について、自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。また、自ら実施した実践研究に基づいて「実践研究報告書」（最終レポート）を作成すること。

実習内容

受講生は、自らの実践研究課題を設定し、実践研究を中心とする実習を主体的に行うことが求められる。そのため、実践研究課題や研究計画等を記した実習計画書を作成し、計画に沿って積極的に実習を行い、実習終了段階では検証計画に基づき自らの実習を評価し、「実践研究報告書」（最終レポート）を作成する。

学校教育実践実習 4、同 5 の報告は、研究成果の発表概要として、後述の「教育実践研究成果発表」の項に、掲載されている。

学校教育実践実習の振り返り会

今年度から教育学研究科全体での実習の振り返り会を実施した。①学校教育実践実習での学びの共有、②今後の実習計画における課題・不安などについての開き合い、という前後半の2部門制で行われた。前半は、ファシリテーター（管理職養成コース）、報告者（学級経営・授業実践開発、教科授業実践、子ども理解・特別支援教育）で構成された班ごとに、実践実習での学びを報告・共有した。後半は、ファシリテーター（管理職養成コースを除く各コース2P2年生）、報告者で構成された班ごとに、今年度4月から7月の学びや今後の課題・不安を開き合い、協議した。実習を多角的に捉え、多様な視点から論究することで、これまでの学びを深化させ、今後の実践研究を発展させるヒントを得ることができた充実した時間となった。

子ども理解・特別支援教育 コース
学級経営・授業実践開発 コース
教科授業実践 コース
管理職養成 コース

4コース合同 教育実践実習 振り返りの会

日時 7月23(火)13:00-16:00

場所 13:00-14:30→21番
14:45-16:00→11番

内容 ①実習での学びの共有
②今後の実習計画における課題・不安
など についての開き合い

後日、事前に課題を整理するためのシートを
配付します。記入して当日ご持参ください。

本件連絡先

友永 光幸(ともなが みつゆき)

教育学研究科 教職実践専攻

m-tomonaga@nagasaki-u.ac.jp

教育実践と省察のコミュニティ 2019

「新しい時代の教育実践をめざして」

「教育実践と省察のコミュニティ」は、平成 26 年度より、「教育実践研究フォーラム in 長崎大学」と連動して 2 日間にわたり開催されている。1 日目に「教育シンポジウム」を、2 日目に「教育実践研究成果報告会」としてポスター発表を行った。シンポジウムでは、「子どもの生活実態から考える学校の役割」をテーマに、基調講演や長崎県を事例とした調査報告、実践報告、グループ協議を行い、今日的な教育課題に関する知見を深める有意義な機会となった。大学院生のポスター発表は、28 件、附属学校・学部教員の研究発表は、22 件あり、学内外を問わず、多くの方々の参加を得た。以下は、講演・協議や大学院生および教員によるポスター発表に関する大学院生のコメント等を「ニュースレターNo. 17」より抜粋掲載したものである。

(1) ポスター発表について

管理職養成コース 青木 大祐

管理職は、未来に対応できる学校をつくっていくために、自校の現状を基にしたビジョンの設定と人材育成、保護者や地域等との連携、働きやすい職場づくり等の実践、検証を考えていく必要がある。ポスターセッションでは、これらのことについて研究したこれまでの成果を発表し、院生や大学教員等と議論しながら、自身の研究を見つめ直したり、管理職の資質や職務について深く考えたりすることができた。非常に価値のある時間を過ごすことができたため、「早く実践したい」という思いを強く抱くことができた。今後、子どもや職員等、学校に関わる様々な人々のために研究の成果を生かした実践を積み重ね、理論と実践の往還を図っていきたいと思った。

子ども理解・特別支援教育実践コース 次山 萌

今回初めて教育実践研究フォーラムに参加して、様々な角度から教育について考える機会を得られた。ポスター発表では、自分の希望する校種に関連ありそうな様々な研究内容を拝見した。どの研究も参考になるものばかりで、中間発表で聞いた研究内容から発展しており、自分が今後取り組みたい研究や教師になった際のことに引きつけて考える事ができた。子どもたちへの支援や教師が子どもから求められている手立ては、子どもの発達段階と実態を考慮して取り扱う必要があること、また、子どもを取り巻く環境は、子どもたちが進むベクトルの方向や長さ大きく影響していくことが分かる研究内容だった。今後の自分の研究や教職人生に役立てたい。

教科授業実践コース 太田 一成

ポスターセッションを通して、様々な校種や教科の発表をお聞きすることができとても勉強になった。自分が専門としている校種や教科のことについて学びを深めるだけでなく、このような機会に様々な校種や教科の研究をお聞きすることで、自分に足りていなかった視点や新たな考え方などを発見することができた。発表者の方々の溢れんばかりの思いや工夫が詰まったポスター発表を見たり聞いたりする中で、発表者や周囲に遠慮することなく質問することができ、充実した時間を過ごすことができた。来年は、発表者として先輩方や先生方の研究から学んだことをしっかり生かしていきたいと思う。

学級経営・授業実践開発コース 山本 真太郎

ポスターセッションでは、大学院生、大学教員、附属校園の先生、公立校の先生、教育センターの方等と共に議論した。様々な視点の切り口から新しいものの見方や考え方が自分の中にうまれた。多面的・多角的に研究を見ることで学びの深まり方が変化すると感じた。特に私が所属する学級経営・授業実践開発コースのポスター発表の議論を通して、自身の研究に活かせる部分が浮かび上がってきたと感じた。新しい視点は従来の固定観念に風穴をあけると思う。セッションという議論の交流の中から、私たちの研究は飛躍的に良いものへ変貌していくことを感じた。今回のポスターセッションで得た新しい見方や考え方を大切にして今後の研究につなげたい。

管理職養成コース 戸田 朋彦

ポスターセッションでは、県教育センターの所員、附属校園の教員、大学教員、院生など、多くの方々と、意見交換する機会を得た。発表内容は、主に人材育成や学校経営に関わること等、今後、学校のリーダーとして生かすことのできる内容であった。参加された方々との多くの議論を通して、研究の新たな示唆を得ることに加え、自分自身の教育理論に深まりと広がりを与えていただいたと思う。自分たちが提案した内容が参加された方々への新たな示唆になると幸いである。今回のセッションを基に、さらに研究を深め、研究の成果を、次年度以降の現場で実践していくことが、本大学院が目指す「理論と実践の往還」の達成につながることであったと考えた。

子ども理解・特別支援教育実践コース 中村 華子

特別支援教育についての発表では、子どもたちの現在の実態と将来の姿が考慮された目標や指導・支援方法が設定された実践研究があった。子どもたちがより豊かに、安心して生きていくために、将来の姿をおもんばかって教育にあたることの重要性を実感した。また、実践の妥当性や信頼性がデータ比較や情報収集等によって明示されている研究が多く、根拠のある教育を現場で行っていくために必要な方法を多く学べた。特別支援教育に深く携わっている現場の先生も来られており、実態やニーズの異なる子どもの例を教えていただいた。多くの分野の方々の意見を聞いたり、話し合ったり、新たな視点を得たりする楽しさがあり、よい学びができたのだと実感した。

学級経営・授業実践開発コース 土手野 佑介

発表の中には私の目指す研究に近い内容があり、大変興味深く、是非ともお話をお聞きしたいと思った。多くの仲間と語り、質問し合うことで自分の研究を深めることができるのがフォーラムの良さであると感じた。また、これまで知っている方でも、その方がどのような理念をもとにして研究をしているのか知る機会があまりなかった。ポスターセッションを通して多くの研究に触れ、知見を得ただけでなく、思考の幅が広がったように感じる。大学院に来て、学ぶことの楽しさを改めて感じる。今回の学びは、自分の研究の意義を再確認するとともに、自身の研究の課題を見直す良い転機となった。今後も気を引き締めて研究を進めていきたい。

教科授業実践コース 中村 賀栄

ポスターセッションでは大学院生だけでなく、大学教員や附属校園の先生方の研究発表もあり、様々な校種、教科についてのポスターを見て回ることで、それらに共通する大事な部分や、校種・教科特有の課題を知ることができ、小学校教育を専攻する身としては大変興味深く学ぶことができた。何よりも、大学教員、現場の先生方、大学院生の他にも教育に携わる方々が大勢集まり、一つの研究について議論を交わすことで、発表者・参観者の両方にとって視野を広げるとても有意義な機会になったと思う。これから研究を展開する私にとって、先輩方の研究内容や方法を知ることができ、大変参考になった。今回の経験を活かし、自身の研究も有意義なものとしたい。

学級経営・授業実践開発コース 古賀 きらら

附属小ポスターセッションでは、子どもが目的意識をもって学ぶことが出来るための授業構成・教材に関する工夫や、学んだことを子ども自身で実社会とつなげて考えたり、実社会で生かそうとしたりするための手立てが見られた。そのどれもが子ども主体で考えられていて、子どもに対する願いや期待が込められていた。私はポスターセッションを通して、常に子どもの可能性を最大限に引き出そうとする、教師としてのあるべき姿を学んだ。大学院生として学ぶ中で、学校現場での授業づくりの厳しさや困難さを感じていたが、教師として子どもたちの未来を見据え、目の前の子ども一人一人としっかりと向き合っていくことの大切さを改めて感じることができた。

教科授業実践コース 清島 はるみ

新学習指導要領では、児童・生徒に必要な資質・能力を育むための学びの質に着目し、授業改善の取組を活性化していく視点の一つとして、「対話的な学び」を位置づけている。セッションでは、専門や校種の異なる参加者がその場で意見や質問を出し合い、多面的・多角的な視点から物事を捉えることができ、「対話的な学び」の大切さを、自分自身が身をもって感じる機会となった。附属小学校の研究発表からは、児童が地域住民との対話や子供同士の協働を通じて省察を重ねながら、考えを広め、深めていく際の教師の手立てを詳しく学ぶことができた。多様な実践や考えに触れる機会を得られたことは、自分にとって新たな財産

の一つとなった。

管理職養成コース 赤木 進也

大学教員と様々な立場の実践者がチームを組み、研究することで、理論と実践の往還が実現し、子どもに届く研究になっていた。具体的な授業実践やプログラム開発など、様々な視点から子どもの育ちを支えるための研究が進められていた。さらに、研究内容を語り、参観者と共に議論することでさらに研究が深まっていた。一人の力では限界があることも、様々な立場の方とつながることによって、子どもの姿を掴んだ研究へと結びついていた。研究内容だけではなく、研究の進め方など今後の教育現場で活かすことのできるヒントが数多く詰まったポスターセッションであった。この学びにより、常に学び続ける実践者でありたいと決意を新たにした。

子ども理解・特別支援教育実践コース 脇田 将

大学院生、大学教員、附属校の先生、公立校の先生、教育センターの方々などが、それぞれ実践されている研究を発表し、相互に議論を行いながら学びを深めている姿が新鮮だった。専門性が高く、より実践的な研究に触れることができ、私自身にとって実りの多い時間となった。また、普段、講義などでお世話になっている長崎大学の先生方の研究発表も拝見させていただいた。専門性が高く、多面的で多角的な視点から分析や実践を行っている研究に触れ、自分自身にとって深い学びとなった。今回のポスターセッションで得た学びや、知見をもとにこれからの研究に生かし、質を高めていきたい。

(2) シンポジウムについて

管理職養成コース 永江 寛幸

昨今、子どもの貧困が社会問題としてメディアに取り上げられるようになってきた。しかし、世間の見方はまだまだ厳しく、貧困世帯の自己責任を容認する意見が少なくない。講演では、実態調査の結果から現在の高校生世代の保護者の3分の1が、近所に話し相手もおらず、育児モデルがない状態で子育てを行ってきたこと、社会全体で孤立が進んでいることがわかった。前述の貧困世帯が経済的な問題と社会からの孤立により貧困から抜け出したくても抜けられないという現実を受け止め、制度的な支援とともに大阪府が進めている学校プラットフォームのような組織づくりも、「福祉」、地域、学校が互酬性を保ちながら進めていかなければならないと感じた。

教科授業実践コース 溝上美由希

シンポジウムでは、教育と福祉との関連という視点からの講話を聴き、現代における子どもたちを取り巻く諸問題・長崎県の現状についてをデータで知ることができた。福祉的な視点からの話を聴くことができ、今までになかった視点を得ることができた。実際に現場で子

子どもたちと向き合うときには、教室の中で見せる姿だけではなくそれぞれの後ろにいる保護者や家庭と向き合わなければならず、児童理解・生徒理解という点で福祉の視点も必要不可欠であるのだということを強く実感した。学校として「できること」「できないこと」を把握し、必要な支援や手立てをいかに子どもたちに対して届けていくかを学ぶ貴重な機会となった。

教科授業実践コース 寺田 よしみ

シンポジウムでは、現代社会における子どもを取り巻く諸問題をデータという形で統計的・分析的に知ることができた。また、教職課程で学ぶ間は、教育についての知識やどう教えるかといった授業実践に関心が向きがちであるが、現場に入った日から教育福祉に関連する問題に直面することになるのだと実感した。グループ討議において、「学校ができること・できないこと」の主題に対して様々な視点からの意見が出された中で、特に事例に基づく福祉に関する行政機関の知識など学ぶべき貴重な情報が多くあがった。これからは、担任が1人で抱え込むのではなく、チーム学校として地域と連携・協働し、子どもたちを守り育てていく必要性があると強く感じた。

学級経営・授業実践開発コース 朝長 紗英子

基調講演では、大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所の所長である山野則子さんに子どもの貧困についてお話していただいた。子どもを取り巻く課題として、貧困や孤立が見えないこと、就学後に各機関で協働・検討する仕組みがないこと、福祉・学校・地域を結ぶ取組が不明確であることが挙げられた。孤立や貧困が問題行動、虐待の原因となることが多いため、早急な解決が必要とされている。実践報告では、長崎市教育研究所の法澤指導主事によるスクールソーシャルワーク実践や長崎大の小西准教授による「長崎県子どもの生活の実態調査」に係る提言をもとに、子どもの置かれた養育環境の現状を知り、解決策を議論する機会となった。

教科授業実践コース 山口 真優

子どもの貧困問題について大学の先生や長崎市教育研究所の方からお話をいただいた後、大学教員、現任教員、大学院生等を含めた7名ほどのグループに分かれ、「子どもを主体にして学校にできること」を考えていった。私たちのグループでは“貧困に陥っている子どもを早期発見するにはどのような手立てがあるか”を中心に話を進めていき、現場の声を取り入れながら考えを深めることができた。今回提示された教育×福祉という視点やグループ討議を経てこれまでになかった視点や学びを得ることができ、有意義な時間であったと思う。今後教員となったときに出会った子どもたちを守れるよう今回の学びを心に留め、今後に生かしたいと考えている。

学級経営・授業実践開発コース 片山 桂維

グループ討議では、シンポジウムでの「子どもを主語にして福祉の視点を学校にどう組み込むか」について議論した。現場に出た経験がない院生と社会経験のある先生方や院生が、同じテーマのもとそれぞれの立場から意見を出し議論することで、多くの学びを得ることができた。現在の教育課題に対して、教師自ら情報を得ようとしたり、一人で抱え込まず学校全体で対応したりすることの重要性を再確認できた。また、改めて教員という仕事は人の人生に関わるものであり、それだけの自覚と責任を伴うものであると感じた。これからの教員人生で出会う子どもが幸せでいられるよう、大学院での学びをより一層充実したものにしたいという気持ちが強まった。

授業デザイン演習

学校教育実践実習は、児童・生徒の実態や授業の観察、自身の授業実践について、専門性の異なる学生や大学教員との省察を通して、自身の学びを再構築し、教員としての力量を形成していくことを目的として、通年で行っている。

本講義では、学生が実習にて主体的に得た学びを、他の学生や教員らと対話的に省察することで、自身や社会における教育的課題に対する深い学びを喚起している。以下に、本講義を受講した感想を記す。

教科授業実践コース 小関 一輝

この講義で実習の開き合いを他の学生と行うことで、実習の中では気づけなかった事象やその背景に気づくことができた。開き合いは違うコースの学生、それも学部上がりだけでなく、現職の先生も交えた学生と行うため、校種・教科の異なる視点からの疑問を受け、現場の目線からの助言をいただくこともあった。大学教員から専門的な立場での意見をもらうこともあり、記録の取り方を深化させていくことができ、毎回の実習での視点の置き方にも一貫性を持つことができた。

また一回一回の実習の省察だけでなく、半期や一年を通した長い視点での振り返りも行う事から、自身の成長を感じることもでき、断片的な経験をつなげて、意味を成した。自分のみならず、資料やほかの人との「対話」を通すことで、「理論と実践の往還」を直接的に学ぶことが出来る、大学院の中心的な講義だと感じた。

教科授業実践コース 林田 太一

これまで、授業デザイン演習にて、自身の実践や観察について、省察を通して、捉え直すことで、自らが専門とする中学校社会科だけでなく、様々な領域に関して、広い知見を得ることができた。私は、本演習で、対話することの大切さを感じた。本演習は、自らの学びを省察することが中心となっている。他の学生や先生方、自分自身との対話を通して、より広い視野から自身の実践について捉えることができた。特に、小学校や特別支援を専門とする学生からは、一人の児童・生徒といった、個に焦点を当てた観察や実践について、専門的な示唆を与えられ、それまで自身にはなかった視点が身についた。このような学びは、専門性の異なる学生や教員と対話することで生成された。中学校の教員は、それぞれが異なる専門性を持っている。異なった専門性をもった教員どうしで対話を行い、より広い視野から実践的な学びを今後も求めたい。



クロスセッション 2019

「クロスセッション」は大学院生が年に数回を目途に、時間割外に開催している自主セミナーであり、平成21年度から実施されている。発表担当の学生が文献研究や実習の要点、実践研究の進捗状況や課題をプレゼンテーションした後、その内容に関して他の学生や教員が一緒になって質疑応答を行う。教員はその学生が今後検討すべき課題、その考察手順、方法等を助言するとともに、プレゼンテーションのスライドや配布資料についても改善点を指摘・助言し、大学院生の実践力向上を支援している。こうした学び合いの機会をとらえて、学部卒大学院生、現職教員大学院生が協働し、研究者教員、実務家教員も一緒に参加して議論することにより、討論(理論)と実習(実践)の有機的な往還が可能となるように努めている。

(1) 学級経営・授業実践開発コースのクロスセッション

平成31年度(令和元年) 学級経営・授業実践開発コース クロスセッション日程

新年度が始まりました。今年度の学級経営・授業実践開発コースは
「3つの愛～ひらきあい・支え合い・高め合い～」をテーマに活動を行っていきます。

つきましては、「実習や研究などをひらきあう場」としての「クロスセッション」の年間計画を立てましたので、日程等空けていただくよう、よろしく願いいたします。

○日時・・・金曜日5限(16:10～17:40)

○場所・・・第1PC室(教育学部棟3Fエレベーターそば)

日付	話題提供者+ファシリテーター	責任者	内容
5月17日 (第1回)	(話)大吉・山口ま・椋尾	M2	実習での学び + 研究の方向性
	(フ)中俣・山口だ・椋尾		
6月21日 (第2回)	(話)中俣・山口だ・片山	M2	実習での学び + 研究の方向性
	(フ)大吉・山口ま・椋尾		
7月19日 (第3回)	(話)土手野・山本・朝永・古賀	M2	実習での学び + 研究の方向性
	(フ)中俣・山口だ・大吉・山口ま		
10月18日 (第4回)	(話)大吉・山口ま・椋尾	M2	学校現場に向けての 不安や意気込み
	(フ)片山・古賀・朝永		
12月20日 (第5回)	(話)中俣・山口だ・片山	M2	学校現場に向けての 不安や意気込み + 実習・研究について
	(フ)土手野・山本・椋尾		
1月17日 (第6回)	(話)土手野・山本・朝永・古賀	M1	実習・研究について
	(フ)山口だ・中俣・山口ま・大吉		

何かありましたら M2の椋尾 宗太郎までご連絡お願いします。

学級経営・授業実践開発コース M2 椋尾 宗太郎
 E-mail : bb11218005@ms.nagasaki-u.ac.jp



クロスセッションの概要

実践研究ラウンドテーブルとは

- 少人数で「互いの実践について、じっくりと語り、聴き取り、考え合う」ことを通して、実践について学び合う。その中で一人ひとりが、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。
- 語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていく。



自分の経験との重なり/違い
どこが重なるのか? /なぜ違うのか?
自分だったらどうだろうか?

自分が当たり前にしてきたこと・考えてきた
ことを問い直す機会になる。そして語りだす。

ラウンドテーブルへのご参加に当たって

- ラウンドテーブルは、少人数のグループで関係性を編みつつ、取り組みを語り聴き、学びあいます。
- 取り組みについて「平場で」学び合う場、「腹を割って意見交換ができる場」を目指して行なっています。

省察に有効な具体化のための8つの問い

あなたはどのように感じたのですか?

生徒たちは何を思ったのですか?

あなたは何を考えていたのですか?

生徒たちは何を思ったのですか?

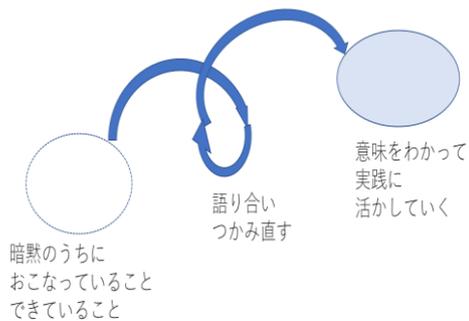
あなたは何をしましたのですか?

生徒たちは何を考えていたのですか?

あなたは何を思ったのですか?

生徒たちは何を感じていたのですか?

• 暗黙の知をつかみ直す



(2)子ども理解や特別支援に関するクロスセッション



教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第1回 クロスセッション～

日時:8月1日(木) 10:00～12:00
場所:31番教室

- M2 野田 若菜
『ASD児との交流及び共同学習
～仲間媒介法を用いて～』
- M2 本田 花菜子
『知的障害のあるASD児のコミュニケーションスキル
向上のための指導・支援』
- M2 松井 奈々
『児童の力を引き出し活かす教師の手立て
～教師と児童でつくる居心地の良い学級を目指して～』
- M1 副島 典子
『子どもがつながり、成長を実感できる学級づくり
～通常学級における特別支援教育～』
- M1 細川 純一
『インクルーシブ教育の視点を活用した
小学校道徳の授業づくり』
- M1 次山 萌
『味覚教育と子どもたちの心の健康』
- M1 中村 華子
『特性に応じた環境調整による自閉スペクトラム症児の
課題従事を促進するための指導・支援の在り方』
- M1 脇田 将
『通常学級における相互に認め合い助け合う学級づくり
の手立て～ソーシャルスキルトレーニングを援用して～』



教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
令和元年度
～第2回 クロスセッション～

日時:3月16日(月) 13:00～14:30
場所:響きあい教室

- M2 野田 若菜
『ASD児との交流及び共同学習
～仲間媒介法を用いて～』
- M1 次山 萌
『味覚教育と子どもたちの心の健康』
- M1 中村 華子
『特性に応じた環境調整による自閉スペクトラム症児の
指導・支援の在り方』
- M1 脇田 将
『通常学級における相互に認め合う学級づくりの手立て
～ソーシャルスキルトレーニングを援用して～』

教育実践研究成果の発表概要

28名の発表者による教育実践研究成果発表会が、令和2年2月14日、15日の日程で、文教スカイホールを会場に開催された。本発表会は、理論と実践を架橋する教育を目指す中で、大学院生の多様な研究成果を地域や学校現場に還元することを旨としている。長崎県教育委員会、各市町教育委員会、長崎県教育センター及び県内の全ての小・中・高等学校に広く周知することにより、大学教員や学外教育関係者など、学内外を問わず多くの方々の参加を得た。研究成果は、学級経営上の課題解決に資するものや教科授業の在り方を提案するもの、子ども理解や特別支援教育などの実践的な発表であった。また、これらに加え、本年度から、管理職の学校経営の指針を示したものも発表され、参加者と活発な質疑応答がなされた。以下に、今年度の発表者とその発表概要を記す。

第1日(令和2年2月14日(金))発表者(発表順)

1 大吉 さやか 「互いの良さに気づき共有できる授業実践

～自他を大切にすることをねらいとして～



平成29年に告示された小学校学習指導要領解説特別活動編において、人間関係を形成するためには、「寛容さをもち、自己と他者を同時に尊敬しながら、異なる意見や考え方をもとに新たな価値を創造的に生み出す力」が必要だと説明されている。下線部にも示されているように、自他を大切にすることは、これからの社会を生きていく子どもにとって、育成が必要だと言えるのではないだろうか。そこで、自他を大切にすることを育むことに有効な手立てを整理し、実践・考察を繰り返していくことで、自身の成長につなげていくという目的を設定し、実践研究を行った。整理できた手立てと学級の実態を踏まえ、『良いところ探し』の活動を中心に据えた2つの授業実践を行った。結果として、互いの良いところを探すという活動は、自他を大切にすることを育成に有効な手立てであるという知見を得ることができた。

2 山口 真優希 「学びの必然性を意図した単元展開に関する実践研究

～児童の学習意欲に着目して～



大学院の2年間の実践研究をはじめとする、様々な場面でたくさんの学びを通して、私自身大きく成長することが出来たと感じている。本実践研究では、児童が学ぶ意義を見出すための手立てとして、単元の導入において単元の終末に解決することが出来るような主題を設け、単元を通して児童と共に学習することが出来た。実践を通して児童が、

「学びたい」「知りたい」「考えたい」と感じる事が出来るよう授業を展開し、児童と共に授業者も楽しめる授業展開をしていくことで、児童の学習意欲が向上することがわかった。また、単元を社会と接続したり、教科横断的に取り扱うことにより、単元での学びを日常生活や社会とつなげることが出来ることもわかった。今後は、大学院での成長や実践研究の成果を活かしながら、新たな学びを吸収して、児童や学校に還元していきたい。そして、実践を通して教師として絶えず成長していきたい。

3 棕尾 宗太郎 「日常生活を題材とした対話的な学びの中で
児童の考えを広げることをめざした授業実践」



本実践研究では、児童の身近な題材を扱い、様々な人と対話することを通して、自己の考えを広げることを目指した授業のデザイン・実践を目的とした。実践1では、児童の実態把握から身近な題材を選択し、社会科・国語科の実践を行った。実践2では、少人数学級において児童に身近な題材を扱うと共に、多様な価値観を得る機会が少ない少人数学級の課題に対するアプローチを取り入れた実践を行なった。実践3では、対象児童1名の少人数学級において、身近な題材を扱い、他学年児童や教職員等との対話的な活動を取り入れた道徳科の情報モラルに関する指導の実践を行った。これらの実践により、身近な題材について児童が様々な人と対話することを通して、多様な視点を得たり、考えの共通点や相違点を見出し、比較・分類したりする様子が見られた。日常生活を題材とした多様な人との対話が、児童の考えの広がりにつながると考えられる。

4 松井 奈々 「一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくり
～担任の働きかけと継続したSGEの実践を通して～」



本実践研究では、児童一人一人が居心地の良さを感じられる学級づくりのために、「学級担任の働きかけ」「継続的な構成的グループエンカウンター（SGE）の実践」の2つの視点から考察し、手立てや効果を明らかにすることを目的とした。学級担任の働きかけにおいては、学級担任の働きかけとそれに対する児童の反応から考察し、居心地の良さを感じられる学級づくりのための手立てとして、①気付きを促す ②考える場面をつくる ③気持ちを共有する ④思いを受け止める ⑤つなげる ⑥見通しを立てる の6つに整理することができた。SGEの実践においては、児童の実態を総合的に把握しそれに応じた実践を継続的にを行い、効果を検討することができた。20分1セットという短時間で

うことができるプログラム作りを意識したため、短学活の時間など学校現場でも活用しやすく、より良い学級づくりの一助としての実現可能な取組となるのではないかと考えた。

5 藤澤 真規子



「一人一人の自己実現を支え、心の居場所となる学級づくりー通常学級に在籍する配慮を要する児童と他児童とのかかわりを通してー」

本実践研究では、通常学級に在籍する全ての児童が、自己肯定感を高め、学校生活を満足して過ごすために、細かなアセスメントによる実態把握を行った後、居場所づくりのためのプログラム（包括的な学級支援）を検討・実践し、学級づくりに有効な方法であるか検証することを目的としたものである。学級に合うプログラムを計画するためには、学級全体と個別を、様々な方法で把握する必要があることを再確認した。また、居場所づくりのプログラムとして、アプローチ、身体アプローチ（クラスワイド支援）とユニバーサルデザイン、個別 SST（個別支援）に取り組んだ。その結果、学級全体が落ち着いた雰囲気になったり、児童同士の関りに良い変化をもたらしたりした。また、粗大運動を行うことで、運動面や行動面の向上が見られた。このことから、あらゆる方面から支援を行うことの必要性を実感した。居心地のいい、安心感のある学級づくりのために、児童一人一人に寄り添い、児童の想いを大切にしながら、今後も様々な方法を考え、実践していきたい。

6 岩田 桂子



「自己選択・決定をすることによる、学びに向かう力を育むカリキュラムマネジメント ～図画工作科における資質・能力の育成を軸として～」

本研究は、「子供が、自己選択・決定をすることにより、学習が主体的となり、学びに向かう力を育むことができるであろう」ことと、「学習を教科横断的に指導することで、それぞれの教科の学習において子供の主体性が高まるであろう」という仮説のもと、実践を重ねることで実証することを目指した。教科横断的な学習を計画する際は、図画工作科の資質・能力を軸とすることとした。図画工作科を軸としたのは、自己選択・決定の場面が多いことや、形や色などを手がかりに自分なりのイメージをもつことが子供にとって学習をメタ認知しやすい等の理由からである。生活科の栽培活動の後、図画工作科で想像した植物を絵に表し、相互鑑賞で国語科の学習を活かして自分の作品について説明をする等、教科横断的にカリキュラムマネジメントを行った。このよう

な指導を継続的に行うことで、子供の主体性が高まり学びに向かう力を育むことができる実感を得ることができた。

7 副島 典子



「子どもが“つながり、成長を実感できる学級づくり
～継続した学級単位SSTを通しての実践研究～」

本研究は、子どもが学び合い、認め合い、ともに成長するために、学級という枠組みを活用して学級内の児童全員を対象に社会的スキル訓練を実施する学級単位SST（CSST）を、児童の実態把握をもとに、計画的・継続的に行うことを中心に実践を行い、効果を検証した。実践を行うにあたっては、児童の実態把握とそれをもとにしたアセスメントを重視してSSTターゲットスキルを設定し、授業実践を8回、平行して絵本の読み聞かせ等の心ほぐし活動を行った。実践の結果、児童が人から認められていると感じる承認は全体的に向上したが、特定の児童には実習の関わりだけではCSSTで学んだスキルが定着しなかったため、学級内に被侵害感を持つ児童もいた。学級全体のスキルの般化のためには、リハーサルやフィードバックを繰り返し行うことが大切であることがわかった。今後も、児童の実態把握をもとにしたCSSTの実践を重ねるとともに、居心地のいい学級にとって不可欠なルールと触れ合いも大切に学級づくりを行っていきたい。

8 細川 純一



「インクルーシブ教育の視点を活用した小学校道徳科の授業づくり」

本実践研究では、通常学級の道徳授業において発達上の困難を有する児童の理解をどのように向上させ、その児童も含めて「考え、議論する」学習活動の在り方をインクルーシブ教育の視点から考察することを通して検討を行った。授業実践では、道徳授業の授業研究の中から見られる支援をもとにインクルーシブ教育の視点を考察した。授業の中でクラス全員が学びの土俵に上がるために必要な視点を持つことで合理的な配慮を考慮に入れた学習が成立することができるかということを検討した。実践研究の結果、インクルーシブ教育構築には学級運営上の配慮を土台としたクラスづくりが大切であり、インクルーシブ教育の視点を活用することと学級運営上の配慮が同時に働くことで子供たち同士の学びあい高めあいが生まれ「考え・議論する」道徳の学習が成立することが考えられた。今後も学校現場や児童の実態に応じて、継続的に授業開発を検討し、実践を行っていきたい。

9 山口 大樹



「小学校社会科における、自他尊重の態度の育成に向けた実践研究」

本実践研究では、児童が居心地の良さを実感するために、教科教育の中で自他尊重の態度の育成に向けた指導の在り方を検討した。学習指導要領の目標の中に公民的資質の向上があるという点から教科を社会科とし、また、自他の考えを共有し、共感し合ったり、尊重し合ったりするなどする経験によって自他尊重の態度が育成されるのではないかと考え、対話の場面に焦点を当てた。実践においては、他者受容の態度を育むために、立場や視点によって、意見が違うことを認識する授業実践と、多様な考えの中で意思決定する活動の中で、自分の意見を伝える授業実践を目指した。授業実践の結果、対話を通して、自分の意見の変容に気づく児童が見受けられた。アンケート結果より有意差が見られなかったものの、見られた児童の変容を6つのグループに大別し、傾向性と今後の課題について考察することができた。この成果を手がかりとし、自他尊重の態度の育成に向けて、自らの資質・能力を高めていきたい。

10 本田花菜子



「知的障害を伴う自閉スペクトラム症児のコミュニケーションを促す指導・支援 一人間関係の発展や維持を促進する機能をもつコミュニケーションに着目して」

知的障害を伴う ASD の児童生徒を対象に、人間関係の発展や維持を促進する機能をもつコミュニケーションを促す指導を行い、特別支援学校で実施可能で効果的な指導方法の在り方について検討した。前半の実習では、やりとりの持続に課題がある児童1名を対象に、クラスメイトとのポジティブなやり取りの増加を目指し、昼休みに集団遊びの機会を設定し指導を行った。その結果、集団遊びでのやりとりに増加が見られ、半年後にもその姿は継続していた。後半の実習では、貸与要求とお礼の始発に課題のある生徒1名を対象に、日常場面で指導機会を増やす指導とヒント提示を遅らせる指導を行った。その結果、貸与要求とお礼の始発が見られるようになった。一方でアンケートから、指導の機会によっては教師の負担が大きく、指導の継続が難しい可能性が示唆された。自然な日常文脈で指導を行うことは効果的であるが、指導の負担を考慮する必要があることが示唆された。

11 佐野 陽汰

「英語コミュニケーションに資する文法理解の指導方法を目指して
－より適切な文法使用に焦点を当てて－」



本実践研究では、中学校英語科において、フォーカス・オン・フォームの考えを取り入れた授業を実践することで、生徒の「学んだ表現をいつ使うかがわかる」という意識にどのような変容があるのかを検討することを目的としている。研究にあたっては、言語形式、意味内容、言語機能の3要素のバランスを意識した指導を行い、さらに授業実践の前後にアンケート調査2回を実施した。授業プリントの記述から、生徒の自分自身の考えをどうにか表現しようとする姿が読み取れた。一方で、うまく自身の考えを書くことができていない生徒もいた。また、アンケート調査では望んでいた結果を得ることはできなかった。実践授業後の考察により、行っていた活動が言語活動となっていなかったり、3要素のバランスがうまく取れていなかった可能性があることがわかった。今後は改善を図り、自然に学んだ表現を使う場面を設定したり、実践的なコミュニケーションの場面を増やしたりして、より良い指導を行っていききたい。

12 林田 太一

「思考力、判断力を育成する中学校社会科授業の開発と実践
－『理解』、『意思決定』に焦点を当てて－」



本研究は、社会科教育の方法原理「理解」と「意思決定」が、思考力、判断力の育成に対して持つ有用性や課題を、具体的な授業の開発・実践を通して、明らかにすることをねらいとしている。本研究では、「理解」と「意思決定」を「理解型Ⅰ」、「理解型Ⅱ」、「意思決定型Ⅰ」、「意思決定型Ⅱ」、計4つに分類し、授業を開発・実践した。本発表では、各方法原理を用いて、開発・実践した授業として、「戦争の終結」、「享保の改革」、「効率と公正」、「公共の福祉」を提示した。授業の開発・実践を通して、「理解」は、Ⅰ、Ⅱともに、思考力の育成が可能である。また、これに加え、「理解型Ⅱ」は、判断力の育成が可能であった。次に、「意思決定」は、Ⅰ、Ⅱともに、判断力の育成が可能である。また、これに加え、「意思決定型Ⅱ」は、思考、判断を連続的に扱った育成が可能である。本実践研究の成果を基に、今後は、様々な方法原理を用いて授業を行い、生徒の思考力、判断力の育成を充実させたい。

第2日(令和2年2月15日(土))発表者(発表順)

13 佐田 彩佳

「より豊かな英語の表現力を育むための実証的研究
～中学校英語科における読む・書く技能の指導を通して～」



外国語科において「思考力、判断力、表現力等」の育成が求められている中、実際の言語活動ではそれらの力を要する活動の不足が指摘されている。そこで本実践研究は、学習者の論理的思考力が課題とされる「書くこと」の領域に着目し、内容にまとまりのある英作文を書く力の向上を目指す手立てを検証することを目的とした。授業実践では、段階的に書く指導、技能統合型訓練、そしてパラグラフ・ライティングを主要な活動として取り入れた。モデル文の分析や段階的に書く活動で思考の整理を行なうことで、話の展開を左右する文の整序は比較的保たれたと考える。しかし、「書くこと」に対する意欲の低さが見られる学習者への対応や、英作文中の綴りや語順、文法、語彙等の細かい修正等において課題が挙げられた。「より豊かな表現」で自身の思いを表出する力を育成するために、技能統合型の段階的な指導を継続的に行い、学習者の実態に合った指導を多岐にわたって行なっていくことが理想である。

14 八尋 慶一郎

「生徒のつまずきを解消することを目指した理科授業
～子どもたちが持つ概念に着目して～」



本実践研究では、子どもたちの誤った概念を把握するための概念調査指標を作成し、その指標を用いて子どもたちを正しい概念に導くための手立てを計画した。指標の中でも「質量保存」の問題は「100gの水に食塩を20g溶かすと、質量はどうなるか」という問題であり、多くの生徒が「質量は100gより大きく、120gより小さくなる」という誤った概念を持っていた。この結果から、2つの手立てを計画した。1つ目の手立ては「大きなばね秤を使って砂糖を水に溶かした質量は、その合計の質量と等しくなることを見せる」、2つ目の手立ては「生徒に粒子モデルを用いて砂糖が水に溶けることを考察させる活動を取り入れる」ことである。結果として、この2つの手立てにより多くの生徒の誤った概念を修正することができた。しかし、生徒の概念を修正することが難しいものもあった。今後は概念調査指標の結果を有効に活かすための丁寧な授業を心がけ、生徒のつまずきの解消に寄与していきたい。

15 浦川 真紀



「英語を読む力を高めるための音読指導の手立てについての検証
—高等学校外国語科（英語）の授業実践を通して—」

本研究では、英語の4技能の中の「読むこと」の領域に着目し、音読指導の手立てをより細かく工夫することで、どのように学習者の英語読解の「速度」と「正確さ」を伸ばすことができるかを検証することを目的とした。実習4では、フレーズリーディングを取り入れたことで、意味のまとまりごとに音読する習慣をつけることができた。実習5では、フレーズリーディングに加え、リードアンドルックアップとテキストなしのリピーティングを取り入れたことで、音読指導に変化が生まれ、指導のマンネリ化を脱却することができた。授業実践を通じての成果に関しては、音読指導を通じて、音読の大切さを伝えることができ、生徒たちの音読に対する意識や英文の読解力を高めることができたと言える。今後の課題として、英文を読む「速度」を高めることに関して、期待した効果を得ることができなかつたため、指導法を再度検討する必要があると言える。

16 山下 裕三



「高等学校家庭科における主体的・対話的で深い学びを実現する授業の研究 ～示範と評価に着目して～」

本実践研究では、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を授業の中でどのように実現できるかを、「示範」や「評価」を活用した実践の中で探ることを目的とした。方法は、被服や調理の実習時に示範を行い、後日、生徒の自己評価と授業評価を実施した。結果、「示範」が生徒の製作イメージやポイント理解につながり、「主体的な学び」に必要であることを再確認した。また、被服製作途中で困った時に生徒が一番頼りにしたのは教師ではなく生徒であり、お互いに支え合いながら活動する「対話的な学び」が実現していた。一方、調理では示範の有無による作品の出来栄に差は見られず、改めて示範の在り方を捉え直す機会となった。今後の課題は、学びの質の高い授業実現に向けて、適切な教材と時間配分を再検討し、より効果的な「示範」と「評価」を実践していきたい。

17 本木 和幸 「高等学校理科生物分野における問題を見いだす力を育成する手立て」



本実践研究では、問題を見いだす力を、気付きや不思議・疑問を意識化し、解決する問題として表現する力と定義し、高等学校理科生物分野において問題を見いだす力を育成するための教師の手立てを明らかにすることを目的とした。授業実践の中で①気付き、不思議・疑問を抱けるような導入、②気付き、不思議・疑問を整理する活動、③学習の振り返り活動の3つの工夫を行った。授業実践を通して、導入の工夫によって生徒は気付き、不思議・疑問を抱くことができ、ワークシートに順序立てて記述させることによって抱いた気付き、不思議・疑問を意識化することができることが分かった。また、学習内容の本質につながる気付きがなければ、学習内容の本質につながる不思議・疑問を抱くことができないこと、問題を見いだす力を育成する手立ての1つとして、図や表を作成したり、読み取ったりする活動を行うことが示唆された。

18 中俣 浪漫 「高校国語科授業における「基礎的・汎用的能力」を伸ばす手立ての検討」



本実践研究の目的は、高等学校の国語科授業において「基礎的・汎用的能力」を育成するためにはどのような手立てが効果的であるかを明らかにすることであった。まずX中学校における教育活動をキャリア教育の視点でとらえ直し、平時の教科授業に潜んでいる『基礎的・汎用的能力』の育成につながり得る手立て」16つを洗い出した。その後Y高等学校所属の国語科教員7名に対するインタビュー結果を基に、これらの手立てが高校国語科の授業にも適用できるものであるかを考察した。インタビュー調査の結果からは、X中学校で洗い出した手立ては高校国語科においても有効であることと、しかしながら現実的には「教師の力量」「受験指導の優先」「実践段階の時間的制約」「準備段階の時間的制約」などの要因によってその実践が阻害されることが示唆された。今後は効果的な手立ての検討をさらに進める一方で、これを阻害する要因の解消策を模索することも重要と考える。

19 青木 大祐

「これからの教育を支える人材育成に関する一考察
～若手教員を育成する組織づくりについて～」



本研究では、現在行われている「Off-JT」や「OJT」における管理職の組織づくりや働きかけなどについて調査し、大学で学んだ理論と結び付けながら、これからの人材育成について考察していくことを目的とした。県教育委員会が主催している人材育成研修にスタッフとして参加したり、実習校の管理職にインタビューをしたりして、「Off-JT」や「OJT」の実態を知るとともに、そこから学んだ人材育成を行う上で必要なことをまとめた。また、これからの急速な社会や職員構成の変化を踏まえ、「対話型組織開発」や「省察の ALACT モデル」などを取り入れた学校の組織開発の必要性を考えた。育成する側とされる側のニーズを聞き合う場を設けるなどの対話を重視した組織づくりや、経験を基にして行動の選択肢を増やす省察の重要性などについて深く考えることができたと思う。今後は、勤務先での実践をとおして、本研究の検証を行うとともに、教育界を担う教員育成に尽力していきたい。

20 赤木 進也

「子どもの育ちを支える大人のつながりに関する研究
～コミュニティ・スクールの管理職に焦点に当てて～」



本研究の目的は、子どもの育ちを支える大人のつながりを構築していく上で、管理職として教職員や家庭、地域へのかかわりの中で何を大事にすべきなのかについて、見える化することであった。そこで、壱岐市内のコミュニティ・スクールである全8小学校の管理職にインタビュー調査を行い、管理職の言葉から学んだことをもとにチェックシートを作成した。管理職は教職員とのつながりの中で、守る働きかけや個の力を見極め、将来を見据えて力を伸ばす働きかけに努めていた。家庭とのつながりの中では、家庭の置かれた背景や思いに寄り添いながら、保護者を育てる働きかけを大事にしていた。地域とのつながりの中では、地域に出向き、人に出会うきっかけをつくり出していた。今後は、チェックシートをもとに自己の在り方を見つめていく。また、「寄ってたかって」総がかりで子どもの将来や地域の未来について考える大人のつながりを構築できるように取り組んでいく。

21 井手 宏暢

「ミドルリーダー育成に関する一考察
ー管理職の働きかけに関する事例分析ー」



本研究では、学校で求められるミドルリーダー（以下、ML）像とML育成のために管理職ができることを明らかにすることをねらいとした。実習校の管理職や現職教員へのアンケートやインタビュー調査を行い、MLを組織へ影響を与える教員と捉え、具体的に「学校組織の好循環サイクル（以下、好循環サイクル）」を駆動させる教員と定義した。また、MLを育成するために、管理職として、①MLに内在する好循環サイクルを意図的に駆動させる。②①のために相手に応じた働きかけを行う。（褒める、指導する、突き放す等）③職員の状況（ライフステージや将来性）を丁寧に見取り、次代を見据えた教員の育成ビジョンを持ち、結果に対する意味づけを行うことと捉えた。これらを踏まえ、MLに必要な資質・能力を、好循環サイクルを身に付け、関わる相手や状況と関連させ駆動する力と定義した。今後は、勤務先での実践を通して、本論の検証や再考に取り組んでいく。

22 岡本 邦明

「学校経営の基盤づくりと経営方針の共有・浸透に関する研究
ーランドデザインの活用に焦点をあててー」



本実践研究の目的は、よりよい学校づくりをするために、どうすれば学校経営方針の共有・浸透を図ることができるかを探ることであった。そして、その共有・浸透を図る1つのツールとして、ランドデザインの活用方法の検討を行った。本研究を通して分かったことは、大きく2つある。1つ目は、ランドデザインを有効に機能させるためには、学校組織としての基盤づくりが必要になるということである。その基盤は3つある。①価値観を共有する組織づくり、②教職員の参画を促し合意形成を図ること、③学校外の関係者の参画を促すこと、である。2つ目は、ランドデザインを常にコミュニケーションや教育活動の実践化における拠り所として活用し続けることである。今後、ランドデザインを学校経営方針の共有・浸透のツールとして実際に運用し、その課題点を明らかにしながら、よりよい学校づくりを全ての教職員、子どもたち、家庭、地域の総がかりで取り組んでいきたい。

23 上久木田雄二 「学校改善を促すより良い学校評価の在り方に関する考察」



管理職養成コースの一期生として、この大学院において「主体的・対話的で深い学び」を自ら体験することができた。この1年間で、自分の考えを文字にし振り返ること、互いの考え方を理解するためには対話をする事、考えの根拠を求めるために文献を読むこと等の重要性を学んだ。これらの学びと並行して、私は「学校評価と学校改善」について研究を深めてきた。まず、学校評価の歩んだ道やその課題等を書籍や先行研究等から学んだ。次に、それらの知見をもとに仮説的に「学校評価デザイン」を生成した。このデザインは、先行研究や自身の経験から導き出された5つの段階と16の諸要素から成る構造図であり、現職校長から一定の評価を得ることができた。他方、この「学校評価デザイン」は、これまで学校が無意識の内に進めてきた学校評価を言語化し再整理したものであることに気づくこともできた。多くの学びの中に自己を没頭させることができるチャンスを与えていただいた関係者の皆様に感謝の意を表するとともに、この経験を今後の職務に生かしていきたい。

24 瀬川 信幸 「働きがいのある職場を作り出す管理職の在り方についての研究」



本研究の目的は、キャリアステージ（経験年数）や校種（小・中学校）ごとにアンケート調査を行い、教職員の働きがいに関する実態を明らかにすることを通して、働きがいをもつ管理職の関わり方やマネジメントについて提案することである。まず、教職2・5・11年目の教員に対して、働きがいや管理職の関わり方に関する自由記述式（①教職員が何に働きがい・やりがいを感じているのか、②管理職のどのような関わり方に働きがい・やりがいを感じるのか）のアンケート調査を行った。次に、アンケート結果を分析し、校種ごとに教員が働きがいを感じる対象及びキャリアステージによる対象の変容を見出すことができた。その背景を考察し、校種・キャリアステージごとに、管理職による効果的な職員への関わり方・マネジメントについてまとめることができた。この研究の成果を活かし、働きがいのある職場作りに向けて、組織マネジメント力を発揮していきたい。

25 寺田 成広 「教員の主体的な学びにつながる校内研修の在り方」



本実践研究は、教員の資質能力の向上のために各学校で行われている校内研究（授業改善研修）の課題を分析し、課題解決のための方策として「自己開発研修」の導入を提案したものである。自己開発研修の内容は、先行研究により「経験学習」とした。経験学習によって各自の実践や研究授業をリフレクションし、教訓を得たり意味づけを行ったりすることをおして、新たなアクションが生まれるサイクルを学ぶ。これによって二つの研修が相互に作用して、教員個々の「主体性」を伸ばし、教員集団の「協働性」が高まることで、校内研修の充実が図れると考えたのである。研究を具現化するために、経験学習の理解と相互作用を意図した校内研修の年間計画及び各回の実施細案も作成した。赴任校の実態に応じて修正を加えながら実践・検証し、学校運営の柱の一つと位置付ける校内研修のいっそうの深まりを目指していく。

26 戸田 朋彦 「円滑な小中連携教育に向けた組織づくりの現状と展望」



本実践研究では、円滑な小中連携教育を推進するためには、どのような組織づくりが必要なのかについて明らかにすることを目的とした。全国の先行事例、先行研究を渉猟することによって、小中連携教育における成果や課題、課題解決のための手立てをどのように行っているかを探り、小中連携教育の課題を、「教職員の多忙化の解消」、「教職員の共通認識の構築」、「小中教職員の相互理解」の3点に絞り、その課題解決のための手立てを分析した。その後、本県の施設分離型の小中連携教育実践校の校長にインタビューを行い、実践における課題や解決の手立てを調査、分析した。これらの分析から、円滑な小中連携教育の組織づくりとして、管理職のビジョンの明確化、時間設定、評価方法の工夫などが重要な要素となることが分かった。今後、自身が現場に戻り、小中連携教育を推進する上での基盤ができたと考える。本研究を踏まえ、円滑な小中連携教育を推進していきたい。

27 朝長 芳卓 「資質向上を図るOJTの実態とそれを推進する組織マネジメント」



本研究の目的は、高等学校におけるOJTの実態を把握し、OJTを推進するための組織マネジメントについて提案することである。複数の調査実施校において、教員に対するアンケート調査、管理職に対する聞き取り調査を行い、学校規模や学科によって、OJTの実態が異なることを明らかにし、それぞれの実態に応じて、メンタリングやOJTチーム、授業研究チーム等の組織マネジメントの在り方を検討した。その際、組織マネジメントやML育成、授業研究の方法等、大学院での学びを生かし、併せて、各管理職の人材育成のビジョンを踏まえた内容にすることができた。本研究を通して、学校の人的資源やOJTの実態を把握し、意図的・計画的に資質向上を図るOJTを推進するまでの流れを示すことができた。今後、管理職の働きかけ（肯定・承認、意味付け、指導・助言 等）の在り方について、さらに研究を深めるとともに、赴任校において実践・検証していく。

28 永江 寛幸 「教職員のエンパワーメントを生み出す学校組織に関する考察」



本研究では、学校の多忙化により、仕事が個業化し、疲弊してしまっている教職員が、再び教職へのやりがいを感じ、それぞれがエンパワーメントを発揮できる学校を取り戻すための組織開発について考察することにした。実習では、どの管理職も教職員のエンパワーメントを生み出すために、他者理解に努め、教職員を認め、信じ、任せるなど誠実な対応で信頼関係を築くとともに、対話や議論をとおして、協働文化の構築にも取り組まれていることがわかった。そして、ご教示いただいたことと1年間の学びから、共生社会の構築に向け、学校、家庭、社会が協働し、人を大切にしていける関係をつくっていくことが、エンパワーメントを生み出す源になり、それをつくり出す当事者となるのは、かかわる者自身である、という結論に至った。今後、人を大切にしながら、人を大切にする学校、家庭、社会の関係づくりをみんなの力で実現していく。

